

入学形態の異なる大学生は自己をどのように意味づけるのか

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

key words : 大学生 入学形態 意味づけ

【問題と目的】

大学への不本意入学者の実態に関して、岩井による一連の研究 (1979, 1980, 1981, 1982, 1984) は、平均して 25% 前後の不本意入学者が存在することを見出している。そして、大学保健管理センターや学生相談で取り上げられるケースの多くが不本意入学者であるという報告 (細木, 1980; 岩村, 1977; 松原, 1993; 岨中, 1979; 土川, 1979) や増加している中途退学や留年学生の背景に不本意入学の問題が潜んでいる (笠原, 1977; 松原, 1985) といった臨床的観点からの指摘、学生の非適応感と不本意感とはつねに有意な関連をもつこと (豊嶋, 1982; 豊嶋他, 1984) や第一志望として入学してきた学生は大学への適応もよく、充実感を持つこと (渡辺, 1995, 1996; 小嶋, 1995, 1996) といった実証的観点からの指摘からも、不本意入学の問題は大学へのインプット問題として重要なテーマであるといえよう。しかし、こうした問題への心理学的観点からの詳細な検討やそれへの焦点づけは殆どなされていない (藤井, 1998; 豊嶋, 1989)。

本研究では、大学生生活の中間点に属する (大学生としての過去と未来を持つ) 2・3 回生を対象とし、入学形態 (過去) と満足感 (現在) を軸としてタイプを作成する。そして、大学入学前のイメージ・期待と入学後の実際の印象および入学後から行ってきたことを設定し (Figure1), 両者を結ぶプロセスおよびそこで生じているダイナミクスについて、ナラティブアプローチによる検討を行うことを目的とする。



Figure1 本研究における各質問の関係図

【方法】

対象者：近畿圏内の私立大学の 2・3 回生 30 名 (2 回生男子 6 名, 女子 14 名; 3 回生女子 10 名) を対象とした。**調査時期**：2003 年 7 月 30 日～8 月 7 日。**手続き**：大学の一小教室にて 1 対 1 の対面法による面接を行い、その内容は対象者の承諾を得た上で、MD に録音された。**質問内容**：1) 現在所属している大学が第 1 希望か否か、2) 大学入学前のイメージ・期待、3) 入学後の実際の印象、4) 入学後興味を持ったことや新しく始めたこと、5) 現在の大学生生活に関する満足感およびその理由 (意味づけ)。

【結果と考察】

入学形態と満足感のタイプ分類

入学形態に関しては、“第 1 希望”か“それ以外”の 2 つが、現在の満足感に関しては、“満足”と“不満足”に加え、両者が入り混じったものや判断の曖昧な“両価的・曖昧”の 3 つがそれぞれ得られ、6 つのタイプが抽出された (Table1)。

本研究の目的・アプローチの性質上、ここではこれら 6 つのタイプのうち“それ以外”で入学しながらも“現在の生活に満足”しているタイプ 7 名 (全体の 23.3%) に着目する。

Table1 入学形態と現在満足感によるタイプ

	N	満足	不満足	両価的・曖昧
第 1 希望	16	7 (4)	5 (3)	4 (3)
それ以外	14	7 (1)	2 (0)	5 (1)

注) カッコ内はうち推薦入学者数を示す。

その理由として、“不本意入学は大学への不適応の大きな原因となるものの、入学後、1 年くらいの間に若者特有の回復力、適応力によって、不本意だった大学のリアリティをみられるようになり、そこに自らの運命を開く可能性が見出されてくる”という指摘 (細木, 1980) や“入学時に悩むことは、むしろ自己成長に取り組む行為といえる”という指摘 (畠瀬, 2000) にもあるように、否定的評価に彩られた大学入学を余儀なくされながらも、それを 1 つの契機として肯定的な大学生活を送ることが十分考えられるからである。

入学形態 (否定) から満足感 (肯定) プロセスの事例的検討

ここでは、入学に際し否定的な意味づけを行っていたが現在の学生生活に満足していると捉えている 7 名のうち 1 事例 (2 回生/女性) を選出した。彼女は辛い受験期を送り、入学に対し強い不本意感を抱いていたが、一方で学問 (心理学/留学) に対する期待も抱いていた。入学後、留学への期待をより具現化するために特殊クラスに参加し、そこで語学力の向上を実感するとともに、より一層興味が増し、結果入学当初の留学への漠然とした期待が明確な目標へと移り変わっていった。そこでの活動をきっかけに、友人関係の幅が広がり、引込み思案だった性格もより積極的なものに改善され、現在の学生生活が肯定的なものへと捉え直されていった。

このように適応 (自己形成) プロセスは、個人内に閉ざされたものではなく、明確あるいは漠然とした目標や理想といった個人が有しているであろう認知的側面 (志向性) に加え、日常的生活空間の中での具体的な行為 (action) とそこでの reaction (たとえば、他者からの働きかけ) が“意味づけ”というメタ行為によって“位置づけられ”、それらを通して目標・理想の明確化や接近および副次的な (予期していない部分での) 成長が可能となる、といった内界と外界との複雑な相互行為を経て達せられる営みであると考えられる。

- A (筆者)：受験勉強や入学試験は、あなたにとってどのようなものでしたか。
 B (学生)：すごく辛いものでした。授業とか毎日あったり、すごい追い込まれる感じがして、すごいしんどかったです。
 A：大学に入学するまでの間、大学という所に対して、どのようなイメージとか期待を持っていましたか。
 B：第一志望じゃなかったんで、行くのがすごい嫌でした。
 A：でも行くようになっていう風に決めた理由とかってありますか。
 B：留学のシステムが他の大学とかに比べて良かったってのもあるし、心理学勉強できたらいいかなあと。
 A：入学後、興味を持ったこととか新しく始めたことはありますか。
 B：ESLっていう留学生対象のクラスがあって、そこに毎日行って、それで英語力はついたかなと思います。それで、興味もやっぱり出てきたし、入学する前よりも、もつと行きたいなあっていう意志がはっきりしました。
 A：そこで 1 年やってきて、得たものってありますか。
 B：色んな年代の人が来てるんで、すごい誰とも話せるようになったし、性格が変わったっていうか、結構すごい引込み思案だったんですけど、色んな人としゃべったり、自分から話しかけたりとかできるようになりました。
 A：(今の学生生活に満足していると) 答えた理由について教えてください。
 B：友達もすごい 1 年生と比べて増えたこともあるし、ESL のクラスが上がってまた新しい人と出会ったりできるしってんで、それであと、心理学の勉強とかも増えてきたので、それが楽しいなと思っています。

(YAMADA Tsuyoshi)